
デジタルでも紙とペンは必要だ!!

大守 瑛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジタルでも紙とペンは必要だ！！

【Nコード】

N5098Z

【作者名】

大守 瑛

【あらすじ】

短編です。

これは期間限定です。

タイトル通りです。

夜の鬼面町には狐のお面をつけた青年が悪を倒すと言う噂がある。

そんな事と話全く関係なく、高校1年の学ランを着た大雅とセーラー服を身に着けたユキは、夕方でも昼と同じような夏の日差しのもと、学校から家へと一緒に帰っていた。

「丸を書いて」

ユキは手に持った、ハードカバーのような何も書いていない本に、ペンでなにやら書いている。

「そして真ん中にプラットA」

そして、ユキが持った本の見開きに二進法で見る0と1が円を描くように出てきた。

本の周りを1と0の数列が鎖の様になり周期的に回る。

大雅は、それを見て呆れた顔をして言った。

「あまり人前で使うなよ」

「別にいいでしょ、のど乾いたんだし」

そんな事を言っているうちに、見開きの0と1はペットボトルの形になり、そのままペットボトルに入ったスポーツ飲料となった。

ユキはペットボトルの封を切り飲み始める。

「著作権侵害だ！と誰から言われそうで」

01の並びの部分が何かのアニメに似ていそうというだけで完全なオリジナルです。

「なにそれ、なんかのアニメネタ？」

「なんか冷たいよ、ユキ」

「そう、大雅がいきなり大きな声を出したから、同じ恥ずかしい人と思われたくなくて」

さらに、冷たくあしらう、ユキ。

「僕は恥ずかしい人だけど、それを使うユキは、おかしいんだよ」

「別に周りに人がいないからいいじゃない」

「そんな事を言ったら、さっきの僕の行動に対する反応がおかしいよ」

「それとこれは全く別の話。ちょっと考えればわかるでしょ、わたしがやったことはどっから見ないと分からないでしょ、でも大雅が叫んだのは別に見ていなくても一本道を挟んでも聞こえるでしょ。本当、もう一回言うけど、ちょっと考えればわかること、TPOを考えて行動しなさい」

背の違ってからユキが下から指を指して言った。

「はい、TPOを考えてなるべく行動します」

こんなに早く主人公が謝る物語も珍しいだろう。

ユキは満足そうに笑みを浮かべていたが、大雅は思案顔で質問した。

「ところでTPOとは何？」

「はあ、大雅そんなことも知らないの、アニメとパソコン以外は全くの無智ね。」

「そうでもない、マンガやライトもベル、それにインターネットそれに」

「言い直すわ、オタクとしてのスキル意外だったわね」

「最後まで言わせるよ！」

「分かったから叫ばないで、ほんとTPOを考がえないわね」

「はい、でTPOで、何だっけ」

「ほんとに大雅は無知よね」

「また繰り返すうだからそろそろ教えて。TPOとは何？」

「TPOは time、place、occasion、の略で服や行動の基準となる3要素。覚えておきなさい。」

ユキは英語は流暢に言い、最後は強く下から言い放った。

「ユキは何でも知っているな」

「ええ、大体のことは知っているわ」

「そんな反応、ほら何でもは」

「ストップ、それ以上は言わせないわ。本当に著作権どうこうになつてくるから。ところでこれ戻す時如何するんだっけ」

ユキは空になったペットボトルを振りながら聞いた。

「確かに、ユキがああのセリフは言わなくて良かったかも。本を開いて」

ユキは手に持っていたハードカバーのような本を開いた。

ページはさつき書いたところだった。

「で見開きにペットボトルを置け、そしてバックと丸の中に書く」

「ああ、そうだったわね。なんでデジタルのことになると、覚えてられるのかね。不思議だわ」

ユキは嫌味を言いながら、大雅が言ったとつりにする。

すると、見開きにおかれたペットボトルはまた次第に0と1の輪になり消えた。

「でもラッキーだったはね。面白い物拾えて」

「ユキ、この本に名前つけただろう」

大雅は、ユキと同じ本をバックから取り出しながら言った。

「三次元再現システムだっけ」

「そうそう、プログラムが入ったCDと一緒に春休みに拾ったものだよ」

冒頭にあつた噂も、ちょうどそのころから出てきたが、もう少し後のお話。

「パソコンにはデータを再現するもので、本物ではないが実際に存在するようになる、耳にたこができるぐらい聞いたわ」

「さらに言うなら、プラットフォームはデータを溜めているところで、一人最大三つ、ぼくとユキで六つだよ」

「ども、何でそんなに素晴らしいデジタル技術に、紙とペンが必要か解らないわ」

「知らないよ」

「とのかく、デジタルでも紙とペンは必要だ、ということね」

「そうだろうね」

りようとユキは、会話をしながら、町では1番大きな公園を横切っていた。

「あ、クレープ屋だ。珍しいな、ユキ買って行くか？」

「大雅にしては珍しくない提案だわ」

「珍しくか、さらに言えば奢るつもりだし」

「失神してもいいくらい珍しいわね。何年ぶりかしら」

「先週行った遊園地以来だけど、幼馴染みと言っていいくらい付き合いで、裕に100回ぐらいは奢った自信だけは有るよ」

「無駄な自身だわ。クレープ、私はキャラメルだから買って来い」

「ありがとの一言ぐらいほしいけど、まいいや」

「別に言ってもいいわ」

「本当に？」

「アリガトウ。これでいいわよね」

「うん、心に沁みないありがたいだった」

大雅は、ユキから離れクレープ屋に向かいながら言った。

そして、大雅は注文道理のキャラメルを一個と、同じものをもう一個買い、ユキの座っているベンチへと向かった。

「はい、クレープ」

ユキは、大雅の手からクレープを奪うと、ハムスターのように小さな口を忙しく動かし食べる。

「ユキ、そんなに急がなくても誰も取りはしないよ」

大雅は、ユキの隣に座ると、ユキはクレープの包装紙を大雅に渡し大雅のクレープを奪い食べたが。

「なんだ同じ味、ちょっとは考えて買ってきなさいよね」

と言いながら、大雅に一口だけ食べたクレープを渡す。

「同じ味買ってきて、悪いのかよ。というか、僕も分も食べるつもりだったな」

「初めから気づきなさい。本当にばかね。」

「確信犯だな」

大雅は、ユキの手から戻ったクレープを、ゆっくり食べていく。

「大雅、確信犯で思い出したのだけど、狐の青年がまた犯罪者を捕まえたみたいだね。ここの治安の悪さも異常だけど、今度は救世主見たいのも現れ出したわね」

「ああ、それか……」

大雅は、ユキから視線を逸らし答えた。

「どうしたの、狐の青年の話を知ったら、自分が情けなくなったの？」

「そういうわけではないが……」

「大雅、あなたは恥ずかしい人だから、そんなことしなくてもいいの。あなたみたいなのがそんなことをしたら、ただの不審者か、痴漢の常習犯みたいに思われるだけだから、あなたはそんな事をしなくてもいいの、分かった」

「慰めるつもりで言ってくれたのはありがたいけど、何一つフォロイになってない」

「あたりまえじゃない、オタク思考で、夜を徘徊している人がいたら、即刻警察に通報するわ」

「確信犯だ！」

そこから会話もなく、大雅がクレープを食べ終えユキを眺めていると。

「何ニヤニヤしながら見てるの、食べ終わったんだから帰るわよ」

「まってよ、すぐそこなんだから」

そんな感じで帰宅

夏のぼんやり明るい夕刻のため、コンビニで今晚は、というか今日はというか迷う時間に、ユキは家を出た。

「全く、こんな時間に年頃の女の子一人に買い物に行かせるなんてこの町の治安の悪さから言っておかしいでしょ」

ぶつぶつ、文句をいいながらも近くのスーパーに行った。

ユキが、買い物を終え帰る頃には、辺りも暗くなり人気もなくな

っていた。

「だから、いやだったのにもう、それにしても暗いわね。さらに、人がいない公園ほど怖いところはないわね」

ユキが、人の代わりに何か、幽霊とかそこらへんのもが出そうなあの大きな公園を横切っている。

「ちょうどクレープ屋があった所か」

昼に大雅とクレープを食べたベンチを見つけ、ユキは何となく座り物思いにふけていた。

なんで大雅の前だと素直になれないのかしら、大雅から言わせれば、ツンデレということになるのかしら？それにしても三次元再現システムを見つけてから、なんだか男らしくなつたというか、気が引き締まっているというか、なんか変つたわ。でもなんで狐の青年の話をする顔と顔を背けるのかしら？わからないわ。あ、なんであいつの事ばつか考えなきやいけないの

ユキは、この町の異常なほどの、治安の悪さがすっかり頭から抜けていた。夜の帳が降り街灯が皓々とともる。

「キヤーがももが」

すつと後ろから手が出てきた。

そして、すぐに口をふさがれユキの耳下で男が囁いた。

「静かにしろ。しかし、いい女を見つけた」

ユキは、ベンチの後ろにある茂みに男の手によって引きずり込まれてゆく。

そこにはさっきの男を含めて3人の男がいた。

何がどうなっているのたすけて、たすけて大雅

男たちは、ユキの服を脱がそうと手をかけたとき、ドンと鈍い音と共に、その中の一人の男が突然倒れた。

「どうした」

ユキを、茂みに引きずり込んだ男が、倒れた男を揺さぶる。

すると、男たちの後ろから狐のお面をかぶった青年が出てきた。その青年の手に持つ物に、ユキは見覚えがあった。

「誰だおまえは」

「……」

何も答えない代わりに、青年は手に持つ物に、なにか書き始めた。そんな少年の行動は無視し、男らつ二人は狐もお面をかぶった青年へと殴りかかっていた。

「あぶない」

大丈夫と、聞き覚えのある声だし、青年はいつの間にか出した杖を片手にひと振り、すると、どすどすと音が二回響き残りの二人の男も倒れた。

ユキは乱れた服を直しながら、待つてと言った。

「もうすぐ警察が来るから」

青年は、ユキに背を向け去ろうとする、「まちなさい、大雅」このユキの声で立ち止まったが、パトカーのサイレンの音がすると、足音も立てずに消えるように去った。

ユキは確かに見ていた、狐の青年の手に大雅とユキが持つ、三次元再現システムの本を。

ユキと大雅しか持っていない、世界でたった一つの本を持っていた。

その後、警察によってレイプの常習犯が捕まった。

ユキは、彼らを警察が探していたことを聞かされ、さらに事情聴取をさせていた。

「わたしがあのベンチに座った時、レイプ犯に茂みに連れ込まれました。わたしを襲うとしたところに、狐のお面をつけた青年が助けられました。そのあと、すぐに警察の方々に来てくださりました」

ユキの事情聴取を、ベテラン刑事らしき人がやっていた。

「で、その狐の青年は、パトカーのサイレンがしたと同時にどこかに行ってしまった」

ユキは、こういう時はしっかりと敬語を使える。
「そうですか、ご協力ありがとうございます」
「狐の青年についてなんですけど、逮捕したりしませんよね？」
「春先から出ている狐の青年、彼は若干過剰防衛気味の件が何件かあるので、警察署に来てほしいとは思っています」
「そうですか……ありがとうございます」
「では、親御さんもいらっしやっただ様なので、我々はそろそろ」

次の日、土曜日の朝、ユキは隣に住む大雅の家に行っていた。

「あら、ユキちゃん、昨日は大変だったわね」

玄関から出た来たのは、大雅の母親だった。

「ええまあ。ところで」

「ところで、あの狐の青年はどうだった、噂どりの美形男子だったかしら？」

ユキの話を遮りしゃべりだす大雅の母、いつもこうである。

「たぶん、そんな美形というわけでもないと思うわ。それで」

「やっぱりそう。しかし大雅も見習ってほしいわ」

本日二度目

「ですね。その大雅起きている？」

今度は遮られずに言えた、ユキ。

「それがまだで今起こしてくるわね」

「だったら、わたしが起こす」

お邪魔すと、ユキは言いながら大雅の家に入り、二階の大雅の部屋へ。

「たく何時まで寝てんの、あいつは」

そして大雅の部屋へ、もちろん大雅はまだ寝ている。

「ぐーすか寝て、あいつの本は」

最後の見開きのページを開く。

「プラットフォームとバックね。書いてみましょう」

ユキは机の上に転がっていたペンを使い大雅の本にまったく同じ

ことを書いた。

すると丈が出てきた。

「やっぱり、さて、起こそうかしら。こら起きろ大雅！」

かなり大きな声でびっくりしたのか大雅は跳ね起きた。

「びっくりした。て、ユキじゃないか」

「これはどういふことかしら」

ユキは本のさつき書いたページと丈を突き出した。

「なんだよ。というかなにが」

「昨日助けてくれたのは大雅、あんたじゃないの？」

「なんのつことかさっぱり」

「とぼけないで、わたし達がこの三次元再現システムを手に入れたから狐の青年が出るようになった。そして昨日の夜も。そうでしょう」

「はあ、仕方がない、それにプラットフォームと書いて」

ユキは丈を戻してから、次もページに丸を書きその中にプラットフォームと書き込む。

すると狐のお面が出てきた！

「そう僕が狐の青年の正体さ。かつこいいだろう」

「ばか、なんでそんな危ないことやっているの！警察にも世話かけて！」

「それを手に入れた時、僕個人のために使ってはいけない、何かしなくては、と行ってそれで」

本当は、ユキが安心して暮らすためなんだけど、恥ずかしくて言えないし、実際はさらに治安が悪くなってきているし、まだ言えない、また言えない……

「ばか、ばか、ばか、ばか、ばか、ばか」

眼尻に涙をためながらなども連呼するユキ。

「でも、ありがとう」

「どういたしまして」

りょうは、恥ずかしくなったのか、斜め上を向く。

「お礼がしたいかな、大雅ちよつとこつちを向いて」

大雅が、ユキの方を見ると、ほんの一瞬唇がくつついた、m o u
t h t o m o u t h。

「あ、あああ」

「お礼なんだからね！」

ユキは今までにない、いい笑顔だった。

そして、りょうはその素敵な笑顔を守りたいと、決意を新たに
したのだった。

だって、この世で一番大切な人なの笑顔なんだから。

(後書き)

読んでくださいますありがとうございます。

感想や、設定の不自然さ、ほかにももろもろの指摘をお待ちしております。

ほかの作品もあるので読んでくださると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5098z/>

デジタルでも紙とペンは必要だ!!

2011年12月17日09時46分発行